

王 羲之（おう ぎし、303年 - 361年）は、中国東晋の政治家・書家。字は逸少。右軍将軍となったことから世に王右軍とも呼ばれる。本籍は琅邪郡臨沂県（現在の山東省臨沂市）。魏晋南北朝時代を代表する門閥貴族、琅邪王氏の出身である。

子に王玄之（長男）、王凝之（次男）、王涣之（三男）、王肃之（四男）、王徽之（五男）、王操之（六男）、王献之（七男）がいる。子孫に王楨之（徽之の子）、智永らがいる。

王羲之は、書の芸術性を確固たらしめた普遍的存在として書聖と称される。末子の王献之も書を能くし、併せて二王（羲之が大王、献之が小王）の称をもって伝統派の基礎を形成し、後世の書人に及ぼした影響は絶大なものがある。その書は日本においても奈良時代から手本とされており、現在もその余波をとどめている。

王羲之の書の名声を高めたのは、唐の太宗の強い支持と宋の太宗により編纂された『淳化閣帖』の影響が大きい。王羲之の作品としては、行書の『蘭亭序』が最も高名であるが、王羲之は各体を能くし、『書断』では楷書・行書・草書・章草・飛白（ひはく）の5体を神品としている。中国では多芸を重んじる傾向があり、

王羲之の書が尊ばれる要因はここにある。『古今書人優劣評』に、「王羲之の書の筆勢は、ひときは威勢がよく、竜が天　王羲之は魏晋南北朝時代を代表する門閥貴族、琅邪王氏の家に生まれ、東晋建国の元勳であった同族の王導や王敦らから一族期待の若者として将来を囑望されていた。東晋の有力者である郗鑒の目にとまりその女婿となり、またもう一人の有力者であった征西将軍・庾亮からは、彼の幕僚に請われて就任し、その人格と識見を称えられた。その後も羲之は朝廷の高官から高く評価され、たびたび中央の要職に任命されたが、羲之はそのたびに就任を固辞した。友人の揚州刺史・殷浩による懇願を受け、ようやく護軍将軍に就任するも、しばらくして地方転出を請い、右軍将軍・会稽内史（会稽郡の長官、現在の浙江省紹興市付近）となった。羲之は会稽に赴任すると、山水に恵まれた土地柄を気に入り、次第に詩、酒、音楽にふける清談の風に染まっていき、ここを終焉の地と定め、当地に隠棲中の謝安や孫綽・許詢・支遁ら名士たちとの交遊を楽しんだ。一方で会稽一帯が飢饉に見舞われた時は、中央への租税の減免を要請するなど、地方行政にも力を注いでいる。

354年、かねてより羲之と不仲であった王述（琅邪王氏と遠縁筋の太原王氏出身）が会稽内史を管轄する揚州刺史となる<sup>9</sup>。王羲之は王述の下になることを恥じ、会稽郡を揚州の行政機構からははずすよう要請したが却下された。王述が会稽郡にさまざまな圧力をかけてくると、これに嫌気が差した王羲之は、翌355年、病気を理由に官を辞して隠遁する。官を辞した王羲之はその後会稽の地にとどまり続け、当地の人士と山水を巡り、仙道の修行に励むなど悠々自適の生活を過ごしたという。

衛恒（衛瓘の子）の族弟である衛展の娘で、汝陰の太守李矩の妻となった衛夫人から、後漢の蔡邕、魏の鍾繇の書法を伝授され、その法を枕中の秘とした。7歳の時から衛夫人のもとで書を学び、12歳の時に父の枕中の秘書を盗み見、その技量が進んだ。さらに各地を巡って古書を見、寝食を忘れて精進し、楷書・行書・草書の各書体について一家をなした。

### 真筆

唐の太宗（李世民）は王羲之の書を愛し、真行290紙・草書2000紙を収集した。崩じた時に『蘭亭序』と一緒に昭陵に埋めさせたと言われている。その後戦乱を経て王羲之の真筆は全て失われたと考えられている。現在、王羲之の書とされているものも、唐代以降に模写したものと、石版や木板に模刻して制作した拓本のみであるとされている。『快雪時晴帖』は、古くは唯一の真筆と考えられており、清の乾隆帝はこの書を愛し、自ら筆を持ち「神」と記した。しかし現在では『喪乱帖』などと同様に、精密な双鉤填墨等の手法による模写本であるとされている。

### 逸話

王羲之には次のような逸話がある。

王羲之は幼い頃から鷺鳥が大好きであった。ある日のこと、一軒の家の前を通ると、鷺鳥の鳴き声が聞こえてきたので、譲って欲しいと頼んだところ、一人の老婆が出て来てこれを断った。翌日、鳴き声だけでも聞

かせてもらおうと、友人の一人を伴って、老婆の家に赴いた。この姿を家の窓から見つけた老婆は、すぐさま鶯鳥を焼いて食ってしまった。そして、老婆は彼に「鶯鳥は今食ってしまったところだよ」と答え、羲之は大変がっかりし、一日中溜め息をついていた。それから数日後、鶯鳥をたくさん飼っている所を教えてくれる人がおり、その人に山の向こうの道観に案内され、道士に「一羽でもいいから譲って欲しい」と頼んだところ、道士はこの人が王羲之と知って、「老子の道徳経を書いて下さるなら、これらの鶯鳥を何羽でもあなたに差し上げます」と申した。彼は鶯鳥欲しさに張りきって道徳経一卷を書きあげ、それを持参して行って鶯鳥を貰い、ずっと可愛がったという。

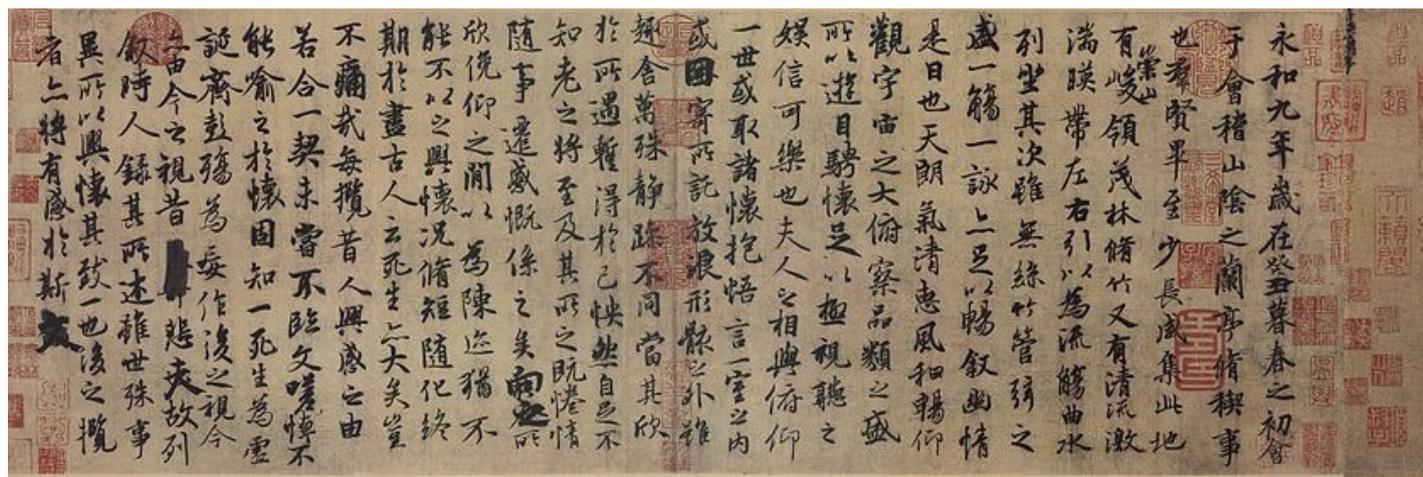
王羲之は興に乗ると手近な物に字を書いてしまう習性があった。ある日のこと、酒屋で酒を買って帰る時に、店の主人が酒代を請求すると、羲之は酒代の代わりに壁に文字を書いたという。主人がその文字を見ると「金」という文字であった。主人がその文字を薄く削って売ったところ、莫大な値になり、その主人はおかげで裕福になったという。

またある日のこと、嘗て門人の家に行き、机の表面が非常に滑らかなのを見てそれに字を書いたのだが、門人の父親がこの落書きを見つけて削ってしまい、後でこれに気付いた門人は、何日もふさぎ込んでいたという。

またある日のこと、羲之が町の中を歩いていると、一人の老婆が扇を売っており、彼は売っている扇の何本かに五文字ずつ字を書いたところ、老婆は「どうしてくれる」と色をなして詰った。すると彼は『これは王羲之という人が書いたものです』と言って売れば、少し高くいっても、きっと買ってくれます』と言ってその場を立ち去っていった。数日後、同じ場所を通ると、先日の老婆が彼を見つけて、「今日はこの扇に全部書いてください」と頼んだのだが、彼はただ微笑んだだけで、そのまま立ち去っていったという。

**蘭亭序**（らんていじょ）は、王羲之が書いた書道史上最も有名な書作品。

石板や木板に蘭亭序を模刻し、それから制作された拓本のなかで、古来最も貴ばれたものは、五代～北宋時代初期に碑石が定武郡で発見された**定武本**である。同系列として**開皇本**がある。定武本は一般に欧陽詢が臨摸したと伝えられるが、これも根拠はない。定武本には覆刻本が非常に多い。その他に張金界奴本と神龍半印本が有名であり、手本としてよく用いられる。張金界奴本は八柱第一本を原本とし、穏やかな書風で神龍半印本よりも評価が高い。秋碧堂帖や余清齋帖がある。神龍半印本は八柱第三本を基とするが、筆意が墨跡より自然であった。



(八柱第三本)



王羲之



蘭亭書院博物館



博物館内の壁画



之の文字が 26 文字使用されている。同じものは一つとない。



王羲之



曲水流觴



曲水流觴 王羲之は何処に座ったでしょう？



曲水流觴の石画



曲水流觴の博物館



王各軍祠



盡得風流



何方がお座りになりましたか？



紹興の公園



曲水流觴



惠風亭